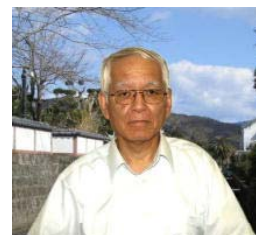


(社)日本測量協会 副会長 星 栞由尚

星栞由尚 (ほしのよしひさ) プロフィール

元国土交通省 国土地理院長

(社)日本山岳会 茨城支部長を勤めている



念願であった劔岳に登ることができた。劔岳は、測量・地図関係者にとっては聖地のような山である。新田次郎「劔岳 点の記」に負うところが大きいのだが、明治期陸地測量部の大先輩柴崎芳太郎氏の登頂物語は、我々測量・地図人にとっては、民族の説話である。あたかも今年、「劔岳 点の記」の映画化が計画され、木村大作監督による撮影に我が日本測量協会も協力することとなり、村井俊治会長が劔岳に登ろうと発案され、私も大いに賛同して登頂計画を立てた。柴崎測量官は、丁度101年前の7月28日に登頂に成功したことが最近判明し、我々もこの日を目指して登ることとした。日本測量協会のメンバーは、村井俊治会長はじめ、関西支所長の山田明氏、GIS研究所主任研究員の平田更一氏、それと私である。これ以外に、北大山岳部OBなどの知り合い関係者の方が多数おられ、全部で17名のパーティであった。リーダーは、劔岳8回目で三等三角点設置のときの北陸地方測量部長だった山田明氏。サブリーダーは北大山岳部OBの平田更一氏であり、ともに山のベテランで大変心強い。



7月27日、前日富山に泊まった村井会長、山田氏、私の3人は、電車、ケーブルカー、バスを乗り継いで、立山室堂まで行き、平田氏達と待ち合わせる。皆々自己紹介の後、いよいよ出発。曇りだが、まあまあの天気である。山田氏の先導で室堂のターミナルから、雷鳥沢まで下っていく。この辺りは、一般観光客も多く、遊歩道となっており、舗装もされている。しかし、遊歩道周辺にも雪が残っており、一部は雪に埋もれている。みくりが池を通り、地獄谷を通過して雷鳥沢に達する。地獄谷では硫黄のにおいが鼻をつく。

いよいよ雷鳥沢からは別山乗越^{べつざんのつこし}まで約2時間の登りである。急傾斜の道を最初の雪渓登りを含めてあえぎあえぎ登っていく。別山乗越にある劔御前小屋に着くや否や大粒の雨が降り出し土砂降りの雨になった。稲妻もピカピカ走り、雷鳴がとどろく。暫く雨宿りをしていたが、山田リーダーが「こうしていても仕方がない。劔沢小屋は近いから出発」と号令し、雨もやや小やみになったので劔沢小屋に向かって下りていった。雷鳴鳴り響く中、劔沢小屋に30分程度で到着し、一安心である。

さて、小屋に着いてから暫く雨も小やみの状態であったが、小一時間も経たないうちに突然強風と土砂降りの雨が降ってきた。またもや雷がなり、最悪の状況である。2時間ぐらいこのような強風、雨、雷が続い



たであろうか。今度は一転して晴れてきて劔岳の威容を拝むことができた。劔岳を間近でくっきりと見るのは初めてである。その堂々として人を寄せ付けぬ峻厳な山壁には真に人知を超えた魔神の山との印象を誰でも持つだろう。柴崎芳太郎は、この山を見てどういふ感慨を持ったのであろうか。日暮れとなり、夕焼けの劔岳に一同感激して明日28日の天候よかれと祈るばかりであった。



明るる28日、この日は、柴崎芳太郎氏が登頂した日である。しかし、天気は最悪である。昨夜来の強風と雨、霧も深い。雨は時折土砂降りとなり、登山可能な状況ではない。山田リーダーは、暫く様子を見ましようと言うが、結局中止の判断となった。中止となると山小屋では手持ちぶさたである。もってきた本を読んだり、眠ったりして鋭気を養う。山田リーダーが、明日に備え、となりの山小屋劔山荘までの経路の確認に行くと言うので一緒に行く。途中4カ所の雪渓を横切り、ほぼ平坦な道を劔山荘まで往復した。

29日、今日が最後のチャンスである。3時に起きる。未だ雨が降っている。霧も猛烈に深い。今日もだめかなと思い4時まで様子を見ようと言うことになる。暫くするうちに雨は止んできた。4時を過ぎる頃には霧もやや薄くなってきた。4時15分、山田リーダーが行きましょう、劔山荘で様子を見ますと号令をかけた。メンバー打ち揃って勇躍出発する。前日偵察したおかげで、劔山荘までの道も霧が深いにも拘わらず、迷うことなく進むことができる。劔山荘につく頃には、やや見通しもつき、雨も降らず好転しているように見え、一同迷うことなく山頂目指して再び出発する。ここからは、傾斜も増し、最初は普通の山道だが、暫く登って行くうちに鎖場が現れる。最初の鎖場は、岩の斜面を横に巻いていくが、下の方を見れば結構な傾斜で、難所として有名な蟹のタテバイは如何なるものかと脳裏をかすめる。さらに登ると一服劔と称する鞍部にでる。まさに一服できるところで上りも下りもここで丁度一休みという所である。一服劔からが大変である。一服劔から前劔まで登っていく。ともかく足だけでは登れない。手足を使いよじ登るようにして登るところばかりである。鎖場が全部で13カ所あり、鎖のないところも岩棚やちょっとした窪みに足をかけ手でつかんで登らなければならない。



前劔から一旦下って鞍部に下りる。鞍部は痩せて両側が切れている。数メートルの鉄の橋が渡してあるが幅が狭く慎重に渡っていく。劔岳の頂上まで、平蔵の頭、平蔵の^{ずこ}コルと登ったり下りたりしながら緊張の連続である。そしてかの有名な難所「蟹のタテバイ」に到達する。鎖とボルトを頼りに、ちょっとした岩のくぼみに足をかけ慌てず騒がず登っていく。山田リーダーが先頭で村井会長、私と距離を保ちながら慎重に手と足を動かしていく。もう少しで終わると言うところで、山田さんの前に登っていた中高年の女性が前にも後にも進めなくなってしまった。恐怖の余り岩にしがみついてしまい、手がかりが分からなくなってしまったようである。山田さんによると、必ずこのような人がいて、渋滞が発生するとのことであった。山田さんが足をこっちに手をそっちにと指示するが思うようにいかない。5分ぐらい悪戦苦闘



したあげくようやくの事で最後の所を登りきることができた。その間、我々は、岩盤の急斜面で宙ぶらりんである。

蟹のタテバイを通過して、後20分ぐらいですよと言う。ところがなかなか頂上とはならない。何回か上り下りしてやっと頂上に着いた。8時半、約4時間の苦行である。頂上についてまず三角点を確認する。山田さん達が設置した三等三角点の古色を帯びた標石をすぐ見つけることができ、村井会長と握手して登頂の喜びを皆で味わった。気がつくやうに、緊張の連続でのはカラカラである。頂上には、20分ぐらいとどまったであろうか。風が吹き結構寒い。名残惜しいが下ることにする。下りは再び慎重に下りなくてはならない。



下りは登りとルートが異なる。登りの難所は通らずに済むが、別の難所が待ち受けている。山頂から暫く下り、蟹のヨコバイを通過する。蟹のヨコバイは、垂直に落ちた岩壁を横切る。まず最初に右足を小さくえぐられた岩棚に下ろす。そして蟹のように岩壁の小さなステップを左につたって行く。さほど距離があるわけではなくせいぜい10メートル程度であるが、下を見ると垂直に落ちており、ガスで下は見えないが、相当深い。垂直の高度感が恐怖心をあおる。鎖は付いているが、足を踏み外したらアウトである。蟹のヨコバイを通過すると垂直に近い梯を下る。これも足をかける順序がある。山田リーダーが説明する。30段近くの梯を一段一段慎重に下りていく。梯を下りるとトイレがあった。実に巧妙なところにトイレがある。少しばかりの平地に小さいトイレであるが、頂上を極め、蟹のヨコバイ、梯を通過して一安心と、丁度よいタイミングで自然が我を呼ぶ。



しかしまだまだ安心はできない。前劔を登り返し、鎖場を通過して、一服劔に到着する。一服劔とはよく言ったもので、ここまで来れば難所はあらかた終わり、劔山荘に下る。再び雪渓を横切り、劔沢小屋に戻る。この頃には疲れが潮のように押し寄せてくる。劔沢小屋は劔山荘よりやや高いところにあるが、小屋の手前の緩やかな登りで足が言うことを聞かない。あえぎあえぎ小屋にたどり着いた。時刻は、12時半。約8時間が既に経っている。

劔沢小屋から室堂まで戻る。劔御前小屋のある別山乗越まで急斜面ではないが登りである。8時間歩いた後の足は重い。普通ならば30分程度の所を1時間かかってしまった。別山乗越から雷鳥沢まで一気に下る。室堂方面が眺められる。室堂のバスターミナルは、雷鳥沢まで下りて再び登らないといけなことが手に取るように分かり、そのつらさが今から思いやられる。地獄谷は、ガスのため通行禁止となり、みくりが池を回っていく。みくりが池の周りは遊歩道となっているが、その遊歩道のちょっとした登りが大変きつい。20歩くらい進んで一休みし、また20歩くらい進むといった案配である。結局、室堂のバスターミナルには、4時半に着いた。

後はバスに乗り、美女平でケーブルカーに乗り換え、さらに立山から電車に乗って富山に着いたのは7時を過ぎていた。東京に帰る手段もなくなり急遽駅前のビジネスホテルに泊まり、体力を使い果たした身体を横たえたのである。

精も根も疲れ果てた劔岳登頂であったが、我々が聖地を極めることができた喜びは大きい。60代になってからは、半ばあきらめた山に登れたのだから、私の人生の最後(?)を飾る壮挙であると自画自賛してい

る。しかし、村井会長に比べると年下にもかかわらず体力が劣ることを反省させられた登山でもあった。今後は、村井会長の域を目指してもっと山に登り体力の増強を図ろうと思う。

最後に、劔岳周辺の地形図に登山路を示して締めくくりとする。

使用した地図は、(財)日本地図センターのホームページで提供している彩色地形図の一部である。

